

有部の涅槃觀

——三解脱門を中心として——

河 村 孝 照

一 問題の範圍

有部の涅槃觀は、これを教理の面から、從來、我空法有と稱して、大乘の人法二空に對せしめて理解された。こうした術語による理解は、端的に教義を示しうる點において便利ではあるが、かならずしも學問的論證を経ているとはかぎらない。有部といえ、とかくその法有思想の面のみをとりあげて、論師たちの主張の全體をとらえていない憾みなしではない。例えば、有部は、有餘依、無餘依の二涅槃界を説く契經の説を踏襲し、各論師たちはそれぞれ有餘依、無餘依の法相分別を施しているが、婆沙論の毘婆沙師は、かかる分別をとり拂つて、有餘依、無餘依同値を主張している面もあるが如きである（大・ⅴ 27. p. 167b-c）。こうした意味から、從來あまり省みられなかつた有部の涅槃觀を、いまは三解脱門を中心として検討を加えてみたい。

三解脱門は、行修の上からは三サマデといわれ、アゴン、ニカーヤをはじめとして、大乘諸經論に至るまで、ひろく説かれるところである。この研究においては、まず有部のそれを検討し、つづいて關連する周邊論書を調査し、大乘における所説をも參照するという手順をもつて進めたいと思う。資料としては、有部にあつては大毘婆沙論を、關連論書としては成實論を、大乘としては、大智度論と瑜伽師地論を依用することとした。

二 婆沙論に説かれた三サマデ論

大毘婆沙論は、この三サマデは契經の所説であるとして、それでは何故に契經はこの三サマデを説いたのであるか、つまり三サマデ建立の意義について説いている。それは、(1)對治の差別による。すなわち、空サマデは有身見を、無願サマデは戒禁取見を、無相サマデは疑を、それぞれ近對治するか

ら三サマヂを立てるといふ。

(2) つぎにこの三サマヂは、それぞれ行相を異にするからであるといふ。空サマヂは空・非我の二行相を、無願サマヂは、苦・非常・因・集・生・縁・道・如・行・出の十行相を、無相サマヂは、滅・靜・妙・離の四行相を行ずるからであるとする。

(3) また、三事によるからであるといふ。空は對治によつて立ち、無願は意樂（期心）により、無相は所緣によつて立てるといふのである。

これが毘婆沙師達が理解した三サマヂ建立の意義であるが、これによれば、三サマヂはそれぞれ獨立した行相をもつことが知られ、これはまた婆沙所引の施設論も指摘しているところである。

しかしまた一方、婆沙論は、施設論を引いて、三サマヂが相攝することをも説いている。

施設論の所説とは、

一、空サマヂは空・無願、無願サマヂは無願・空であるが、無相サマヂはただ無相のみをとる。

一、空サマヂはこれ空であるが無願・無相をも攝し、以下同様にして各サマヂの一一は他の二サマヂを攝具する。

このようにして、婆沙論所説の三サマヂの法相分別、なら

びに相攝關係は斷惑論であることが知られる。四諦十六行相を修する上からいへば、三サマヂはそれぞれ別立さるべきであり、正性離生に入つて見道位となれば、三サマヂの果徳はそれぞれ平等であるといふのである。

i — とくに空サマヂについて —

有部の毘婆沙師達は、三サマヂのそれぞれの意義を明らかにすることにとめたが、また、契經が、この三サマヂとは別に空サマヂのみについてしばしば説いていることに論及し、その理由を説明している。それは、

(1) 身見の對治のため。

大毘婆沙論は、施設論の所説として十空を紹介し、この十空を説くに至つた所以について、空行相は二十種の身見の近對治であるから、諸處にあつておくの空分別がなされるのであるといふ。

十空は、施設論の文として紹介されるが、現存施設論にはこの論門は説かれていない。また婆沙論によつて補説されたといふ難心論は九種空を説く。いずれにしても、これら各種の空が説かれたのは、近對治の身見のおおききためであるといふのであるから、煩惱の根本であるとされる身見を對治する空サマヂは、勝定といわれえようが、それについては毘婆沙師はここではふれていない。

(2) 空サマヂは佛不共法であること。

また毘婆沙師は、「空サマデは是れ上座の住處なり」と説く契經をひいて、空サマデは佛内道法といい、佛不共法であると言く。すなわち、三サマデの中、無願と無相は外道にも相似の法があるが、空サマデのみは相似の法は存しないというのである。

(3) 佛陀はとくに空定を重んじたこと。

婆沙論は、ヴィルダカの釋種の大量殺戮の時、佛陀が阿難に、「我れ多く空サマデに住するに由り……安靜不動なること山の如きなり」と語つたことを例證として、佛陀が空定を重んじたことを取りあげている。

これらはいずれも、毘婆沙師が、空サマデは勝れた機能を有するものであると説いたと理解されうるので、このみかたは、さらに無相サマデの解釋の上にもみられる。

(4) 無相心定をえた修行者は、何の果報をうるかと問うに對して答える中に、

「此の定は、我々所の相無きを觀するが故に無相と名づくるも、
而も實には是れ空なり」

と釋すが如きであり、また、雜阿含法印經所説の無相定を釋するにあたつて、

「彼れは有情想を捨す。謂く、空定を以て、色等の法を觀じ、有情想を捨するなり」

と説くところによつても、空サマデは無相サマデを攝する勝

定であると解していることがわかる。

以上によつて、毘婆沙師たちが、三サマデにおいて空サマデをいかに取り扱つていたかということを知りうるであらう。

ii — とくに毘婆沙師の主張するところ —

しかし、婆沙論の敘述は、こうした三サマデの一般的理解のほかに、毘婆沙師たちが、特別の役割りを荷つて三サマデ論を展開したことが知られる。それは一つには、實際修行の面からいつて、この三サマデは三世において預流者はどのようになつて成就するかという問題についてであり、他の一つは三三サマデ論である。

行者の修行をめぐつて、三世と三サマデとの成就・不成就の關係について、毘婆沙師たちは、一行歷六小七六七の問答をひろげて詳論する。それでは何故に毘婆沙師たちは、三世における三サマデの成就・不成就の檢討を求めるのであろうか。大毘婆沙論はこれを

一「不成就性を撥無し、成就性といつてもそれは假名にすぎない」と主張する異執に對して、

二「過未無、現在無爲」と主張する異執に對して、

三「實の成就、不成就性無し」と主張する異執に對して、成就、不成就性實有を説かんがために三サマデ論を展開するのであるといふのである。

これによつて、毘婆沙師たちの三サマデにおける法相分別はこれら異執者の主張を止めて、行修の可能を説かんとする意圖よりでたものであることが知られる。

三重サマデについては、婆沙論は施設論の所説としてこれととりあげている。⁽⁹⁾この三重サマデは、契經にも説かれるところなく、また八健度、鞞婆沙論にも説かれず、發智・大毘婆沙論に至つて、施設論の所説としてとりいれられているが、現存施設論にはこの論門を缺いている。

この三重サマデの修行道については、主として三つの問題點が存する。それは、(1)三重サマデの有漏無漏分別、(2)現起の人の有學・無學分別、(3)現起の時機である。婆沙論は、無學の人が隨意に現前するものであり、それは有漏であると説いている。⁽¹⁰⁾

三重サマデの修行道を導入した意圖は、悟後の修行を課したものと解してよい。三重サマデをこのように解すれば、この徳目を課した施設論ならびに發智・大毘婆沙論の、二乗の修行論や涅槃觀の内容はきわめて重要な意義を含むものと考えられる。

以上、婆沙論における三サマデ論を通觀した。その間には、種種の注目すべき學説をみることができた。例えば空サマデが勝定であることも説いていること、三重サマデによつて悟後の修行も課せられたことなどであつた。しかし、毘婆沙師

達の直接の問題は異部の主張に對して、有部の義を強調しようとするところにあつたといえる。そのために法相分別に力點がおかれたというのが婆沙論所説の三サマデ論の一特徴であると指摘できる。

それでは、この三サマデは、以下各論においていかように取り扱われているであらうか。

三 成實論における三サマデ論

成實論は卷十二において有部の三サマデ論をとりあげてこれを論ずる。彼れに従えば、經において三サマデを説いても、それは空の功能のあらわれを、それぞれ無相といい、無願といつたのであつて、義は空の一にすぎない、として三サマデの一義たることを説き、⁽¹¹⁾またさらに有部の行相分別を否定する。⁽¹²⁾三重サマデについては、有部の所説を駁して、有學の人をもこれを現起し、無漏であるとした。⁽¹³⁾

四 大智度論における三サマデ論

大智度論は卷二十において三サマデを論じている。論は、有部の行相分別をそのまま採用するが、⁽¹⁴⁾しかし二種の空を説く。衆生空と法空とである。つづいて有部の成就不成就性質有を破して、修行者の罪福の成不は法空によつてのみ成りたつことを説く。⁽¹⁵⁾このように、有部の法相の義にならつて、三

サマデにおのおのその義をたてるところがあるが、それは、大乘の義よりいえば、行の因縁をもつて三種の義を説いたまでであつて、大乘の眞義は法空によつて諸法の實相を緣じて、世間は即ち涅槃なりと觀するのであると説く。婆沙があくまで分別にのみとどまつていたのに對して、これを行門の要諦に配して、ただちに諸法の實相を緣じて涅槃の當體を觀するところに有部に對する特徴を見出す。また三重サマデは説かれるところがない。

五 瑜伽論における三サマデ論

瑜伽論においては、主として卷一二、七二、七四、八六などにおいて説かれてゐる。

まず三サマデの行相について説かれるところをみれば、
(1) 空サマデは二行相、無願は六行相、無相は八行相（卷一二）⁽²⁶⁾
(2) 空サマデは二行相、無願は六行相、無相は四行相（卷五五）⁽²⁷⁾
(3) 空サマデは十六行相、無願は二行相、無相は四行相（卷八六）⁽²⁸⁾
(4) 遍計所執の自性に由るが故に空、依他起の自性に由るが故に無願、圓成實の自性に由るが故に無相（卷七四）⁽²⁹⁾
などというのである。

このように三義を別立して行相を立てることについては、婆沙と同斷であるが、分別の内容においては婆沙と異なるところがあり、また三サマデを遍依圓の三性に配當した分別は、

瑜伽における獨特の説であるといえる。

こうして、三サマデにそれぞれ行相をあげて別立の意義を示しているとともに、また一方、卷十二においては、

「若し此の處に於いての彼の物有ること無ければ、此の道理に由りて之れを觀じて空と爲す故に空性と名づく。即ち所觀の空の希願すべき無き故に無願空と名づけ、此れ一切を遠離するが故に無相と名づく」⁽³⁰⁾

と説いて一眞如に三義を具することを明している。大智度論と同じく三重サマデは説かれていない。

六 むすび

以上の各説を結べば、(1)有部の毘婆沙師たちは、三サマデ別立の行相を説いたが一サマデに三義を具することをも説き(2)空サマデが勝定であることも理解していた、(3)三重サマデを施設して悟後の修行を課した、などを指摘しうるのであつて、これらは、大乘において展開した空觀ときわめて密接な關係の存することが知られ、有部のそれがその基本に横たわっていることが看取できた。(4)しかし毘婆沙師たちが強調したかったのは、異執者を遮せんがための三サマデの成就不成就性の實有論であつて、有部にとつてはこれが當面の問題であつたがために、法相分別に終始した觀がある。大乘はこれを切り開くに法空觀をもつてしたことが理解されるが、從來

有部はこの大乘側からのみしか理解されなかつたことが知られる。（終）

- 1 大正藏 V 27. p. 172 a, p. 538 ab, V 28. p. 346 b-c.
- 2 " V 27. p. 538 b, V 28. p. 346 b, p. 512 b-c.
- 3 " V 27. p. 538 b, V 28. p. 346 b, p. 512 b.
- 4 " V 27. p. 538 c, V 28. p. 346 c, p. 512 b-c.
- 5 " V 27. p. 538 c, V 23. p. 346 c, p. 512 b-c.
- 6 " V 27. p. 538 c, V 28. p. 346 c, p. 512 b-c.
- 7 " V 27. p. 540 a, p. 37 a, V 28. p. 347 c.
- 8 " V 27. p. 540 a, V 28. 347 c.
- 9 現存施設論は、西藏大藏經丹珠爾部所收のものと漢譯のそれとがあるが、山口・春日井兩氏の研究によつていずれも大毘婆沙論所引の施設論とは系統を異にしていることが明らかにされている。東洋學論叢（昭和二十七年）「施設論考」参照。
- 10 大正藏 V 28. p. 925 b.
- 11 " V 27. p. 540 b-c, V 28. 348 a.
- 12 " V 27. p. 542 a-b, V 28. p. 349 c.
- 13 " V 27. p. 541 c, V 28. p. 349 a.
- 14 " V 27. p. 541 c, V 28. p. 349 a.
- 15 " V 27. (vol. 183-4), V 28 旧欠
- 16 " V 27. p. 919b-c, cf. p. 538 a. 今のところこの學派を指定する資料に乏し。
- 17 " V 27. p. 543 a, V 28. p. 350 b.
- 18 " V 27. pp. 543 c-4 a, V 28. pp. 350 c-1 a.

- 19 " V 32. p. 335 b.
 - 20 " V 32. p. 335 b.
 - 21 " V 32. p. 335 b.
 - 22 " V 25. pp. 206 a-7 a.
 - 23 " V 25. p. 207 b.
 - 24 " V 25. p. 207 b.
 - 25 " V 25. p. 207 c.
 - 26 " V 30. p. 337 c.
 - 27 " V 30. p. 605 b.
 - 28 " V 30. p. 780 a.
 - 29 " V 30. p. 705 a.
 - 30 " V 30. p. 337 c.
- ※ 初期佛教における三解脱門については、早島鏡正博士「初期佛教と社會生活」（昭和三十九年）のなかに取り扱われている。